

## 2010・広大マスタースズ市民講座報告

“野っばら探検講座：ホタルの川の探検とナマズ捕り”を終えて

宗岡洋二郎

毎年8月下旬に開いている本講座も3年目になる。今年もまた多くの方々の協力を得て、さる8月22日（日）に昔ながらの自然が色濃く残る志和町で催された。喜々として仲間とともに水辺でたわむれ、夢中になって魚を追っかける子供たちの姿を見ていると、毎年のことだが、「遊びは心身の正常な発達にとって重要不可欠なものである」という最近の研究仮説が正しいものであることを確信する。



写真1：腰まで水につかりながら魚とり



写真2：捕えた体長90cmほどのコイを川に戻す

脊椎動物、特にイヌやサルのような社会的行動を示す哺乳類の子供たちが軽く咬んだり、転げまわったりして、じゃれ合っている光景はよく目にすることだが、これらの行為は知能の発達を促し、社会的スキルを身につけるために必要で意義あるものと考えられている（M.ウェンナー、心と脳のサイエンス 01号、p.p. 20-29、別冊日経サイエンス、2010、参照）。無脊椎動物の昆虫においても、羽化後の仲間との接触は正常な発達にとって極めて重要なものであることが明らかにされている。金沢工業大学の長尾隆司教授はコオロギを用いて次のようなことを明らかにしている。

羽化直後のコオロギを一匹ずつ網かごの中に入れて隔離し、お互いを見たり、においを嗅いだり、他の個体の声を聞いたりすることはできるが接触はできない状態で飼育すると、形態的にも異常な個体に成長する。この異常個体のオスをメスと一緒にすると、正常なオスならば求愛行動を示すが、異常オスは攻撃行動（DV）を始める。長尾教授は、隔離飼育したこのような個体に“インターネットコオロギ”なる名称を与えた。パソコン、メール、ゲームなどでコミュニケーションは果たすが、肌の触れあう生の接触コミュニケーションの少なくなった現代の子供たちを思い浮かべて命名したのかも知れない。

スポーツのような、あらかじめ定められた規則に従う遊びも重要だが、ルールのない全く自由な遊び（自由遊び）は想像力や創造力を育てるためにはもっと重要であるという（前述のM. ウェンナー参照）。適応的心身の発達のための遺伝情報発現には“自由遊び”なる外部からの環境刺激を必要とするよう、我々は進化の過程でしっかりと身に刻み込んだに違いない。“自由遊び”の効用が本格的に研究され始めてまだ日も浅いが、今後の研究によってこの仮説は正しいものとして確立されるに違いない。

講座への参加者は毎回30名前後（保護者とスタッフを含む）で、中には幼稚園児もいた。全員に自由な川遊びをさせたかったが、危険の回避そのほかの事情から適当な場所を選ぶのが困難だった。実験や観察も自由にさせたかったが、器具や薬品の調達が難しかった。大学で廃棄処分する顕微鏡などを譲り受け、一括管理する制度が欲しい。



写真3：顕微鏡でメダカのうろこの変色を観察





写真4：4歳児たちも川の中で大喜び



写真5：捕えたナマズやコイを放流

最後に、お世話になった志和堀公民館、志和堀小学校、東広島市生涯学習課、広大の学生ボランティア、老人会聞光会の皆さん、特にナビゲーターとして努力して下さいました安藤忠男先生に感謝の意を表す。“仕事をする事、人を愛すること、この二つができれば人間は一人前である”という言葉聞いたことがあるが、私もこの考えに賛同する。講座に参加してくれた子供たち全員が、一人前の人間に成長してくれることを心から願っている。